

## ダニエル書 - 第一百七十九番

真夜中の叫びとローマの預言的役割——ダニエル書における終末の時代を  
解き明かす

Jeff Pippenger

2024-04-09

私たちはいま、ダニエル書の観点で言えば、聖域に足を踏み入れている。というのも、十四万四千人のための「真夜中の叫び」を表す節々に到達したからである。その節々はまた、掲げられる旗印の封印をも明らかにしている。これらは、終わりの日々に関するダニエル書のうち、封印が解かれた部分に属する節であり、「時が近い」ときに解き明かされるイエス・キリストの啓示をダニエルが表現したもので、16節で猶予期間が閉じられる直前のことを示している。

十一章十四節に示されているとおり、幻を確立するのはローマであり、それゆえ十一節から十五節をたどるにあたってはローマに注意深く目を向けることが重要である。なぜなら、「幻がなければ民は滅びる」のであり、さらにイザヤ書七章八節と九節を信じないなら「必ずあなたがたは堅く立つことができない」からである。

ウライア・スミスは、その著書『Daniel and the Revelation』の中で、ある預言上の規則に少なくとも四度言及している。その規則は、預言的勢力は、神の民と「関係を持つ」ようになるまでは、預言の中で特定されないことを示している。彼が最初にこの規則に言及するのは、預言の証言の中にバビロンが導入されることに関連してである。

「神の民とそれほどまでに深く結びつき、聖史の記録を完全なものとするためにその国々への言及が不可欠となったときには、その国々が預言の中で取り上げられることを予期してよい、というのは解釈における明白な原則である。」 Uriah Smith, Daniel and the Revelation, 46.

少なくともほかに三度、スミスはその規則を取り上げ、その三度のいずれにおいてもユダヤ人の「同盟」を指摘しているが、そのうち一つの言及では同盟が紀元前162年に成立したとしている。だが、ほかの二つの言及は、ユダヤ人とローマの「同盟」の成立を紀元前161年とする現代の歴史家たちの見解と一致している。

「読者に改めて注意を促すまでもないが、地上の諸政府は、何らかの形で神の民と結び付くまでは、預言の中に登場しない。ローマは、紀元前161年の有名なユダヤ同盟によって、当時の神の民であったユダヤ人と結び付いた。『マカバイ記第一』8章; ヨセフス『ユダヤ古代誌』第12巻第10章第6節; Prideaux, Vol. II, page 166. しかしこれより七年前、すなわち紀元前168年に、ローマはマケドニアを征服し、その国をその帝国の一部とした。したがってローマは、まさに雄やぎの征服されたマケドニアの角から、他の方面における新たな征服へと進み出ているものとして、預言の中に導入される。それゆえ、この預言においては、それは預言者に対して、あるいは適切に言えば、雄やぎの角の一つから出て来るものとして現れたのである。」 Uriah Smith, Daniel and the Revelation, 175.

しかし、スミスも紀元前162年だったと述べている。

「また同じ勢力が聖なる地に立ち、それを食い尽くすことになっていた。ローマは、紀元前162年に同盟によって神の民であるユダヤ人と結び付きを持つようになり、この年をもって預言の暦の中で顕著な位置を占めるのである。しかしながら、ユダヤを実際の征服によってその支配下に置いたのは紀元前63年になってからであり、しかもそれは次のような経緯によるものであった。」Uriah Smith, Daniel and the Revelation, 259.

そして、その出来事に三度目に言及したとき、彼は再び紀元前161年だと言っている。

「帝国の世俗的な諸事件を経て七十週の終わりにまで私たちを導いたのち、預言者は23節において、ローマ人が紀元前161年のユダヤ人の同盟によって神の民と直接に結び付くようになった時代へと私たちを立ち返らせる。そこから私たちは、教会の最終的勝利と神の永遠の王国の樹立に至るまで、出来事の一直線の流れに沿って導かれるのである。ユダヤ人は、シリアの王たちによって甚だしく圧迫されていたため、ローマに使節を送り、ローマ人の援助を求め、また彼らと『友好と同盟の契約』を結ぼうとした。第一マカベア記8章; Prideaux, II, 234; Josephus' s Antiquities, book 12, chapter 10, section

6. ローマ人はユダヤ人の願いを聞き入れ、次の文言による布告を彼らに与えた。—」

「ユダヤ民族との援助と友好の同盟に関する元老院の布告。ローマに服属するいかなる者も、ユダヤ民族に対して戦争を仕掛けること、またそうする者を穀物や船舶、金銭を送って援助することは許されない。もしユダヤ人が攻撃を受けることがあれば、ローマ人は可能な限り彼らを援助するものとする。さらに、ローマ人が攻撃を受けることがあれば、ユダヤ人は彼らを援助するものとする。また、この援助の同盟に何かを付け加え、あるいは削除することをユダヤ人が望むときは、それはローマ人の共同の同意のもとに行われるものとする。そして、そのように付加された事項は効力を有するものとする。」 「この布告は」とヨセフスは言う。「ユダが民族の大祭司であり、その兄弟シモンが軍の将軍であった時に、ヨハネの子エウポレモスとエレアザルの子ヤソンによって記された。これは、ローマ人がユダヤ人と結んだ最初の同盟であり、このように事が運ばれた。」 ユライア・スミス『ダニエルと黙示録』271頁。

スミスがなぜ紀元前162年を引用したのかを説明する責務は私にはない。私の推測では単なる誤植だったのだろう。私の論点は、彼が次のように呼ぶもの—「神の民とそれほどまでに結び付いたとき、聖なる歴史の記録を完全なものにするために彼らへの言及が必要となるので、預言の中で諸国が取り上げられるのを期待してよいという、解釈上の明白な規則」—に彼が置く強調点に言及することにある。スミスはその規則を強調する際、ローマが神の民と結び付いたのは紀元前161年、23節の「league」においてだと述べているが、ローマが預言的叙述に最初に導入されるのは紀元前200年、すなわち紀元前161年より39年前だと認めている。

「ここで新たな勢力が導入される—『汝の民の略奪者』。逐語的には、とニュートン主教は言う、『汝の民を打ち砕く者』。遠くティベル川のほとりで、ある国が野心的な企図と暗いたくらみを糧として自らを養っていた。当初は小さく弱かったが、驚くべき速さで力と精気を増し、あちこちに慎重に手を伸ばしてその武勇と戦の腕の逞し

さを試し、やがて自らの力を自覚すると、地上の諸国の間で大胆に頭角を現し、無敵の手で彼らの政の舵を握った。それ以後、ローマという名は歴史の頁に刻まれ、長き時代にわたって世界の事柄を支配し、時の終わりに至るまで諸国民の間に強大な影響力を及ぼす運命にある。」

「ローマが語った。するとシリアとマケドニアは、まもなく自らの夢の様相に変化が及びつつあることを知った。ローマ人は、エジプトの若い王のために干渉し、アンティオコスとフィリッポスが企てた滅亡から彼が守られるべきであると決意した。これは紀元前200年のことであり、シリアとエジプトの affairs に対するローマ人の初期の重要な干渉の一つであった。」ウライア・スミス『Daniel and the Revelation』256頁。

ローマが預言的叙述に初めて登場するのは紀元前200年であり、その導入が記されている十四節は、ローマに関するダニエル書全体で最も重要な言及である。というのも、その節こそが、幻を確立する象徴としてローマを規定しているからである。スミスがそのような預言の原則を強調しつつ、ローマの権勢が「導入された」時点として紀元前200年を認めながらも、紀元前161年を引くことができたのはなぜか——この問題を私が解決したいとは思わない。もし私が解決すべき問いがあるとするれば、それはスミスが定義するその原則が妥当かどうかである。もし妥当であるなら、私は十四節は、紀元前161年の同盟以前に起こったユダヤ人に関する出来事と結び付かなければならないと主張するだろう。

私は、13節から15節に描かれている歴史は、終末の時代に教皇ローマが預言の歴史に入り込み、しかもその歴史において神の民であるアメリカ合衆国と関連してそうすることを指し示している、と理解している。イエスは常に初めによって終わりを示されるので、異教ローマが歴史に登場した紀元前200年は、その時代の神の民と関わりを持っていないなければならない。ゆえに、スミスが紀元前200年のローマとユダヤ人との間に直接の関係を見いだせなかったとしても、私はスミスの規則に同意する。

第十一節と第十二節は、アンティオコス3世（「大王」）が率いるセレウコス朝と、プトレマイオス4世フィロパトル王が率いるプトレマイオス朝エジプトとの間で紀元前217年に起きたラフィアの戦いの勝利とその余波を示している。この戦いは、プトレマイオス朝とセレウコス朝の間で争われていたコイレ・シリア（シリア南部）およびパレスチナ南部の支配権をめぐる攻防の最中に起こった。ラフィアにおけるプトレマイオス4世フィロパトルの勝利により、彼は一時的にコイレ・シリアとパレスチナ南部の支配を維持することができた。

その17年後の紀元前200年に起こったパニウムの戦い（パニウム山の戦い、またはパネアスの戦いとしても知られる）は、アンティオコス3世が率いるセレウコス帝国と、プトレマイオス5世が率いるプトレマイオス朝エジプト王国との間で行われた。

31年後の紀元前167年、セレウコス朝によるユダヤ教の宗教実践の弾圧とヘレニズム文化の押し付けに対するユダヤ人の反乱であるマカバイの反乱が、現在のイスラエルにあたるユダヤ地方の小さな町モデインで始まった。

問題となっている出来事は、悪名高いギリシア系セレウコス朝の支配者、アンティオコス4世エピファネスに関わるもので、彼はユダヤ人住民に対して、ユダヤ教の宗教儀礼の

禁止やエルサレム神殿の冒瀆を含む厳格なヘレニズム的慣習を押し付けた。自らの布告を徹底させるため、アンティオコス各地の町や村に使者を送り、ユダヤ人住民に命令への服従を強要した。

モデインで、セレウコス朝の役人の一人が王の勅令を執行するためにやって来て、ユダヤ人住民に異教の儀式に参加し、ギリシアの神々に供え物を捧げるよう命じた。マテティアスという老齢のユダヤ人祭司はこの命令に従うことを拒み、いけにえを捧げようと前に出たユダヤ人とセレウコス朝の役人の双方を殺した。マテティアスとその家族によるこの反抗行為は、セレウコス朝の支配に対するマカバイの反乱の始まりとなった。

マテティアスと、その五人の息子たち——ユダ・マカバイを含む——は山地へ逃れ、セレウコス朝の軍勢に対してゲリラ戦を開始した。この反乱はやがて勢いと支持を増し、セレウコス朝に対する一連の軍事的勝利へとつながった。

紀元前167年のモデインにおける出来事は、ユダヤ史における重大な転換点であり、マカバイ戦争の開始、ならびに異国の支配に対する宗教的自由と独立を求める闘争の幕開けを画するものであった。ハヌカーの期間に祝われる歴史的出来事を示す、エルサレムの第二神殿の再奉獻は紀元前164年に行われたが、これは第二十三節の「同盟」に先立つこと三年であった。

エルサレムと神殿を取り戻したのち、マカバイ人は神殿を異教の汚れから清め、本来の宗教的用途へと復した。伝承によれば、彼らが見つけた聖別された油は壺一つ分だけで、七枝の燭台を灯せるのはわずか1日分にすぎなかった。ところが実際には、その出来事についての同時代の歴史的証言は存在せず、そのユダヤ教の作り話が文献に現れるのは6世紀になってからである。ホワイト夫人は、背教したユダヤ教会をカトリック教会と比較し、両者が宗教を人間の慣習や伝統に基づかせていることをとりわけ強調している。教皇教会の歴史における数多くの作り上げられた奇跡と同様に、1日分の油が8日間持ったという作り話にも、歴史的な証言はない。

ダニエル書第十一章十節は、四十節の三つの戦いのうちの第一の戦いを示している。私は以前、これを冷戦の三つの戦い、また三つの代理戦争として特定してきた。ある姉妹が、これら三つの戦争の第二に当たるウクライナ戦争を冷戦と定義することに疑義を呈した。彼女が正しく指摘したとおり、そこには夥しい死と破壊が存在してきたからである。私が以前の文章において「冷戦」の三つの戦いとして定義してきたものは、黙示録第十三章の地の獣の歴史の期間中に起こる三つの世界大戦と、これら三つの戦いとを区別するために、そのような表現で定義したのである。これら三つの戦争は代理戦争であり、またそのようにも定義されてきた。

今後これらの文章において、私はこれら三つの戦いを、「四十節の三つの戦い」すなわち代理戦争として特定するつもりである。これは、熱戦を冷戦として特定するという齟齬を取り除くためである。私の定義によれば、四十節の三つの戦いには、四十節の一部ではあるものの、1798年の戦いは含まれず、1989年の終わりの時から四十一節の日曜法に至るまでの三つの戦いのみが含まれる。これら三つの戦いは、北の王と南の王との戦争という文脈の中で遂行される代理戦争として特定するのが、より正確である。四十節の歴史において、それはカトリシズム（北の王）と共産主義（南の王）との戦争を表している。

それら三つの戦いのうち最初のものは、1989年にカトリックが共産主義に勝利したことを示している。教皇制は、代理軍であるアメリカ合衆国と手を組み、1989年にソ連を一掃したが、頭（または「要塞」）であるロシアはなお立ち続けていた。現在のウクライナ戦争は、再びカトリックと共産主義の戦いであり、教皇制はロシアに対する代理としてウクライナ政府を用い、以前の代理勢力であるアメリカ合衆国を含むグローバリスト的な西側世界の支援も受けている。その戦争は第十一節と第十二節に表されており、共産主義（ロシア）がカトリックに打ち勝つことが示されている。

それら三つの代理戦争の第三は、第十五節においてパニウムの戦いとして示されている。その戦いは、プトレマイオス朝（南の王）とセレウコス朝（北の王）との間で行われた。その戦いにおいて、カトリックの代理軍は再び合衆国である。

1989年の第一の戦いにおいて、アメリカ合衆国の共和党の角の代理軍は、ローマ教皇庁によって、ソビエト連邦の政治構造を打ち倒すために用いられたが、その頭（ロシア）は無傷のまま残された。第二の戦い、すなわちウクライナ戦争においては、ナチスの代理軍がロシアによって打ち破られる。第三の戦いにおいて、アメリカ合衆国、すなわちローマ教皇庁の代理軍は、再び南の王を打ち破る。

三つの戦いには「真理」の印が押されており、最初と最後の戦いは勝利を収めるアメリカ合衆国の代理軍によって戦われる。最初の戦いでは南の王の頭は無傷のまま残され、第三の戦いではアメリカ合衆国の代理軍が南の王の頭となる。第二の代理軍は、第二次世界大戦でも教皇制の代理軍であった。いずれの場合でも、ナチズムの代理軍は敗北したし、また敗北するだろう。三重の連合が成就する第十六節より前に、教皇制はそのすべての敵を完全に屈服させる。

プトレマイオス [プーチン] は、勝利を有効に生かすだけの賢慮を欠いていた。勝利に乗じて攻勢を続けていけば、おそらくアンティオコスの王国全土の支配者となっていただろう。だが、二、三の威嚇や脅しを加えるだけで満足し、野獣のごとき情欲に、妨げられることも抑えられることもなく身を委ねるために講和した。かくして敵には勝ったが、自らの悪徳には打ち負かされ、自ら打ち立てることもできたはずの偉名を顧みず、酒食とみだらな行いに時を費やした。

彼は成功によって心が高ぶったが、それによって少しも強められはしなかった。というのも、彼がそれを不名誉な仕方で行ったために、彼自身の臣民が彼に反逆したからである。ユライア・スミス『ダニエル書と黙示録』254ページ

プーチンの勝利が彼の終わりを示しているという第二の証しは、南王国ユダの王ウジヤに見いだされる。彼も軍事的勝利によって心が高ぶり、その後、プトレマイオスの場合と同様に、聖所で祭司の務めを行おうとし、らい病に打たれて直ちに権力の座から退けられた。ウクライナ戦争におけるプーチンの勝利は、南の王（無神論の王）としての彼の終わりの始まりを示している。彼の終わりは、四十節の冒頭に登場する預言上の南の王（フランス）によって型どられており、そこではプトレマイオスの場合と同様に、指導部を打ち倒す革命が示されている。プーチンの終わりはまた、ソビエト連邦の終焉にも表されている。そこでは指導者（ゴルバチョフ）がソ連を解体し、直ちに、国際連合（無神論の南の王である終末期グローバリズムの象徴）で職を得た。ウクライナでのプーチンの勝利

の後、彼はまた、ワートルローのナポレオンとその後の流刑、さらに、らい病とそれに続く追放のウジャ王、加えて酒に溺れて迎えたプトレマイオスの最期、および1989年のソ連の終焉によっても象徴される。

パニウムの戦いは紀元前200年に起こり、まさにその年にローマは公然と歴史に介入する。彼らの預言的叙述への参入は、第十六節に示され、紀元前63年に成就したエルサレム征服に先立つものである。その時、彼女はエジプトの幼王の擁護者であると宣言したのである。北の王と南の王を巻き込む第四十節の第三の戦いにおいては、教皇権が再び歴史に介入し、ロシアの保護者であるかのように装うであろう。まさにその同じ時に、型においては、セレウコスがパニウムの戦いでプトレマイオスを打ち破ったのであり、それによって、第四十節の最初と最後の戦いにおける教皇権の代理軍である合衆国が、「エジプト」（南の王）を打ち破ることが示される。

紀元前200年には、ツロの淫婦が16節の日曜法における三重連合に先立って姦淫の歌を歌い始める中で、象徴的にローマ教皇制が見いだされる。同時に、アメリカ合衆国は国際連合を凌駕し、こうして十人の王の筆頭たる王としての地位を確保する。日曜法で成就する三重連合のすべての力学は、16節の前に既に確定している。

国際連合によって代表されている竜の勢力の政治的構造は、16節において、自らの政治的構造を獣に与えることに同意する。しかし、そうする前に、教皇権が竜の宗教を征服する。異教は再び取り除かれなければならない。プロテスタンティズムは、40節の最初の戦いにおいて、レーガン時代に取り除かれ、そして最後の共和党大統領の時代には、508年の時と同様に、竜の宗教もカトリック教に服従させられる。教皇権が王座に就けられることへのいかなる宗教的抵抗も取り除く過程は、レーガン時代に始まり、トランプ時代に終わる。背教したプロテスタンティズムのカトリックへの抵抗は40節の最初の戦いで取り除かれ、心霊主義の抵抗は40節の最後の戦いで取り除かれる。

同様に、人間の出来事が複雑に絡み合う中で、背教的プロテスタンティズムは、黙示録17章の十人の王たちの上に立つ宗教的・政治的権威として自らを確立しなければならない。したがって、パニウムの戦いは、アメリカ合衆国が国際連合に対して優位に立つ時を、16節の日曜法の直前に示している。

竜、獣、そして偽預言者が、それぞれ独自の預言的特質を有することは、預言における確立された原則である。その預言的特質の一つは、獣（カトリック主義）が、預言的には常にローマの都に位置づけられているということである。偽預言者は、預言的には常にアメリカ合衆国に位置づけられている。しかし竜については、竜が預言的にどこに位置づけられるかという特質は、それが常に移動するという点にある。竜は天に始まり、次いでエデンの園に来て、そして最終的にはエジプトに位置づけられる。

語って言え。「神である主はこう仰せられる。見よ、わたしはおまえに敵対する。エジプトの王ファラオよ、自分の川々のただ中に横たわり、『わが川はわたしのもの、わたしは自分のためにそれを造った』と言った大いなる竜よ。」エゼキエル書 29章3節。

竜の預言的な所在は移動する。ヨハネの時代には、その王座を意味する竜の座はペルガモスにあると見なされていた。

ペルガモにある教会の御使いに書け。両刃の鋭い剣を持つ方がこう言われる。わたしはあなたの行いと、あなたの住んでいる所、すなわちサタンの座のある所を知っている。また、あなたはわたしの名を堅く保ち、わたしへの信仰を捨てなかった。それは、わたしの忠実な殉教者アンティパスが、あなたがたの中で、すなわちサタンの住む所で殺された日にもそうであった。黙示録 2:12、13。

異教ローマの慣行は、自らが関わりを持つに至ったあらゆる異教の神々をローマ市へ持ち帰り、それらをパンテオン神殿において表象することであった。これが、ダニエルが「彼の聖所の場所は投げ倒された」と記している理由である。異教ローマの聖所の場所はローマ市であり、それは西暦330年にコンスタンティヌスによって倒されたのである。しかし、ローマ「の中に」あった聖所はパンテオン神殿であり、Pan-Theon とは「すべての神々の神殿」を意味する。ローマ人はサタンの座の所在地をペルガモからパンテオン神殿へ移した。ホワイト姉妹は、異教ローマが竜であることを示している。

このように、竜は第一義的にはサタンを表しているが、第二義的には異教ローマの象徴である。『大争闘』439頁。

異教ローマは十の国々に分裂し、フランスはフランス革命期にエジプトの無神論を取り入れたことで南の王となった。1917年までに、竜はフランスからロシアへと移った。十節は1989年を表し、十一節と十二節は「境界線」の戦い（ラフィアとウクライナ）を表しており、パニウムの戦いは、教皇制が十六節で三重の連合を確立する際に成し遂げる第三の段階を表す。それは四十節の隠された歴史を表している。

次回の記事でこの研究を続けます。

イエスがカイサリア・フィリピ [パニウム] の地方に来られたとき、弟子たちに尋ねて言われた。「人々は、人の子であるわたしのことをだれだと言っているか。」彼らは言った。「ある人たちは、あなたをバプテスマのヨハネだと言い、ほかの人たちはエリヤだと言い、また別の人たちはエレミヤだとか、預言者の一人だと言っています。」イエスは彼らに言われた。「それでは、あなたがたはわたしをだれだと言うのか。」シモン・ペテロが答えて言った。「あなたはキリスト、生ける神の子です。」イエスは彼に答えて言われた。「ヨナの子シモン、あなたは幸いです。それをあなたに明らかにしたのは血肉ではなく、天にいますわたしの父です。わたしもあなたに言う。あなたはペテロである。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。よみの門もそれに打ち勝つことはできない。わたしはあなたに天の御国の鍵を与える。あなたが地上で結ぶものは、天においても結ばれ、あなたが地上で解くものは、天においても解かれる。」それから、イエスは御自分がキリストであることをだれにも言ってはならないと、弟子たちに命じられた。その時からイエスは、御自分がエルサレムに行き、長老たち、祭司長たち、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、三日目によみがえらなければならないことを、弟子たちに示し始められた。マタイの福音書 16:13-21。